

映画を観る ダンス

あつまれどうぶつの森とサッカーゲームよろしく

Hulu映画見てた

特集

コロナ禍の 若者のリアル

こーたらしてた。息がつまりそうでした

ドラマ「ぼくのいのち」

TWICEダンス練習

あつ森

映画を観る

2020年に入り、世界的に流行した新型コロナウイルス感染症は、私たちの生活を大きく変えました。4月には「緊急事態宣言」が発表され、半年が経った今では感染対策のための「新しい生活様式」が定着してきたように感じます。今まで通りのコミュニケーション、余暇活動は「自粛」を受け、制限せざるを得なくなり、新しい価値観や交友関係が様々な場面で生まれています。

このような状況下で、「若者」にはどのような影響があったのでしょうか？

5月の段階では休校になった小中学校と高校が全国で86%（文科省調査）、またオンライン授業を実施している大学は97%（eラーニング戦略研究所）というデータが報告されています。

しかし、これらのデータやニュースで取り上げられていることは社会全体として捉えた「若者」の一部であり、環境の変化や動向です。では、「若者」の実際は？ コロナ禍に生きる若者の「リアル」な思いは若者ひとりひとりにあるのではないのでしょうか？

今回の特集では、コロナ禍における若者個人や若者の活動から語られるストーリーから、ひとりひとりの「今まで」と「これから」を示し、一般的なイメージだけではない若者の姿を探ります。

こやこやどうー
トーストと見てた！

こやして寝てあそんで充実してた。

コートコート

BTSの推しをながめた

アニメ バスケ

泣いて、ねて、でんわしてた。あと笑ってた

背景には、山科青少年活動センターで実施したロビー投票企画『閉館中になしてた？』で利用者のみなさんからの回答を掲載しています。

ぷちメッセージ

変わるものと、 変わらないこと

京都市ユースサービス協会
専務理事
岩佐仁己



2020年7月に京都市ユースサービス協会の専務理事になりました。岩佐仁己です。よろしくお願いします。

私のユースサービスとの出会いは今からちょうど30年前までさかのぼります。

京都市の青少年担当に着任し、当時、京都駅近くの市内で1か所しかなかった京都市青少年活動センターに関わるようになったのが始まりです。そのときは、当協会も発足して2年しかたっており、ユースサービスの考え方も多くの人にとってはまだまだ新しく、思い返せば、私の仕事の大半はその普及だったのかもしれません。

そして、30年、青少年・若者をとりまく環境は様変わりしました。少子化はひとときも止まることなく、スマホ、SNSなどの通信手段は当たり前になり、そして今年に入ってからコロナ禍です。青少年だけでなく社会全体に課題はどんどん更新され、重層的にさえなっている現状があります。

このような中で求められるのは、青少年が主体的にそれら課題に向き合い、そして持てるエネルギーで新しい社会をリードする、そんな姿です。そのために必要なことは、様々な変化を受け入れつつも、彼ら彼女らのニーズに応えられるユースサービス、ユースワークの展開であり、それこそが時代を超えてなお本質的なことではないかと、思いを新たにしているところです。

contents

- 3 特集
コロナ禍の若者のリアル
- 8 高校生が作ったページ
高校生が「HSP」について考える
- 10 シリーズ
はたらく若者
- 12 TOPICS
農業体験事業を実施しました！
- 14 ユースかわら版
東山青少年活動センター
開館50周年記念事業 ほか

ユースサービスの理念

子どもから責任ある大人へと成長する青少年を支援しています。

家庭、学校、地域社会、職場ほか、青少年が自主的な活動場面への参加を通じて、社会と交わり、自身の興味や関心を豊かにし、必要に応じて、助言、情報、または多様な人的・物的資源が得られるような機会を提供します。

公益財団法人京都市ユースサービス協会の新型コロナウイルス対策について

京都市と協議を行い、新型コロナウイルス感染症対策ガイドラインを以下のような基本方針をもって策定しました。

- 新型コロナウイルス感染症の拡散状況を鑑み、若者の置かれている状況にあわせて対策を講じつつ、本来の若者自身の活動・成長機会が損なわれないための機会づくりを模索する。
- コロナ禍においての状況、またコロナにより明確になった若者の置かれている状況や、若者の声を社会に届けることに取り組む。
- スタッフ（職員・アルバイト・ボランティア等）個人の心身状態にも配慮するとともに、若者を始めとする利用者の健康面に留意し、利用者への協力依頼を含め感染症対策を講じつつ、日々の施設運営・事業運営に取り組む。
- 従来の方法にとらわれず、これまでの代替手段としてだけでなく、これまでをふりかえりつつ、かかわりをより良くアップデートしていくことを試みる。
- 委託・指定管理を受けている行政機関との情報共有・協議に取り組むとともに、市民に対する説明責任を果たせるようにする。

詳しい対応策に関しては、当協会ホームページをご覧ください。



コロナ禍の私たち

Ⅰ・Hさん
(17歳)高校3年生
インタビュアー
谷勝礼奈さん
(高校3年生)



谷: 今回の自粛期間のことを教えてください。

Ⅰ: オンライン授業が午前中だけだったので、時間の余裕があって趣味と娯楽に時間を使えました。

谷: 辛かったことはありますか？

Ⅰ: オンライン授業の最初の方は課題が多いのが大変でした。

谷: 学校ではなく自宅にすることが多くなったと思うのですが、自宅学習は出来ましたか？

Ⅰ: そこそこ出来たと思います。時間的な余裕があったので資格取得に向けて勉強ができました。正直、普通に通学している時より落ち着いて取り組めました。

谷: 学校が6月から再開したということで、対面授業とオンライン授業どちらの方が自分に合っていると思いますか？

Ⅰ: 好きなのはオンラインで、勉強の質を考えると対面授業です。

谷: 久しぶりの学校はどうでしたか？

Ⅰ: 感染リスクを下げるため行事が縮小されたけど、新しい生活様式の中で自分たちなりに対応して青春が送れたと思います。

谷: 実際に何が縮小されましたか？

Ⅰ: 文化祭がオンライン開催になって、学校のみなので動画を作ったりzoomで中継しながらイベントを楽しんだりしました。体育祭は規模が縮小して球技大会になりました。

谷: 行事が縮小された時はどんな風に感じましたか？

Ⅰ: 文化祭は準備をしている時は楽しめるかな、と思っていただけども、実際見てみると先生方や実行委員の方が工夫されていて、感染しない上で楽しめることに重きを置いて下さっているのを感じて温かく思いました。

谷: この感染症の拡大によって、学生生活に関する不安やこれから求めていくものを教えてください。

Ⅰ: 自粛期間中は、高3なので受験に對しての不安があり、オープンキャンパスもなかったのも何もできることがなくて、ずっと大丈夫かなと感じていました。また、今は学校内でクラスターが起きないでほしいです。この時期は寒いので換気がされてなかったり、お弁当を対面で食べたなど、慣れから来る甘さが見えて来ているので学校全体となって感染予防をしたいです。

谷: コロナ禍の若者として何かメッセージはありますか？

Ⅰ: この危機を乗り越えるためには社会全体で歩みを合わせ、陰鬱な社会の流れがあるけれども、その中でも自分の趣味や譲れないものを持つていて欲しいです。



K・Hさん
(19歳)大学1年生
インタビュアー
谷勝礼奈さん(高校3年生)



谷: 自粛期間中のことを教えてください。

K: 今は大学に週1回と月2回の授業のため通っているけどやっぱり遠くて、オンラインで授業受けるのがやっぱりいいなあっていう気持ちと、友達が作れないから辛いっていうのがあって良いところも悪いところもあるって感じます。

谷: 自粛期間中に楽しかった事はありますか？

K: うーん、楽しかった事は特になかったですね……。

谷: 確かに新しい学校生活を全く過ごせていませんもんね。辛かったことはありましたか？

K: サークルがなかったたので友達が多く大学内にいなくて、情報交換が出来ないから、課題がとても多い時それを友達と助け合いながら出来なかったことが辛かったです。

谷: 高校から大学入学までの時間でコロナの影響を受けたと感じる場面はありましたか？

K: 2月からバイトを始めたけれど、パートタイムの方しかバイトに入れなくなりました。また、入学式がなくて、大学のオリエンテーションも1日ある予定だったけど、1時間で終わってしまいました。

谷: 現在はそのバイト先でバイトをされているんですか？

K: 今もしています。けど、シフトに入っている量はとても少ないです。他の売り場に派遣されて働いていますが、月に2〜3回です。

谷: この自粛期間中は何をして過ごしていましたか？

K: 自分でも何してたんやろって感じ、あまりこれしてたものが無かったです。

谷: 私も自粛期間の記憶はあまり残っていません。来年からキャンパスに通って対面授業ができると思いますか？

K: ずっとこのまま対面とオンラインの併用な気がします。

谷: 私もそんな気がします。毎日大学に通いたいと思いますか？

K: はい。先生に直接質問したくても、その先生のメールアドレスが知らないことがあるし、月2回しかない授業は友達と別れるときに、また1ヶ月後と思うと寂しい気持ちになります。やっぱり毎日通いたいなあと思います。

谷: この感染症の拡大による学校生活の不安を教えてください。

K: 対面でやる予定だった取っていた授業が急にオンラインに変わったなど、対面の授業があまりないことです。

谷: 自粛期間が明けても大学にあまり行けてない状況なんですね。今後の学生生活で1番求めている事はありますか？

K: 友達がいないのもっと大学に行ってもっと友達を作りたいです。



実際にこのコロナ禍を過ごしてきた若者4名に、どのようなことを感じたのか、お話を伺いました。1〜3段目は、インタビューを受けた若者と同年代の高校生が対談形式でインタビューをしてきています。

安藤さん
(15歳)高校1年生
インタビュアー
坂本 帆花さん
(高校1年生)



坂: 安藤くんのお家は飲食店をしてるんやっけ？

安: そうやで。居酒屋してる。

坂: じゃあ、そういった家業のことも含めて、4月から今までのコロナの影響で変わったと思うことはなに？

安: うーん、やっぱり家業のことかなあ……。お客が減ったのはもちろん、宴会はもうとっと減ったな。

坂: あーなるほど。宴会が減ったのは居酒屋にとつて大きいダメージやな。それを安藤くん自身が感じることはあった？「お小遣い減った」とか。

安: お小遣いは減らへんかったよ(笑)でも絶対お店の収入は減ったやろうし、親に「無駄遣いせん」といてねって言われたりしたよ。でもそのくらいやな。ただ何より、俺自身のお金の価値観は明らかに変わった。無駄遣いせんとして自分で思えたり、お金の大切さをここ最近でより感じるようになった。失つて初めてその大切さに気付くんやなあ。

坂: おお！ それはいいことやな。コロナでいいことも悪いこともあったんやね。じゃあ今度は学習面について聞こうと思う。安藤くんは医者を目指してるんよな？

安: そうやで。

坂: それならなおさら勉強を重視してると思うけど、4月からの勉強はどうやった？

安: 環境はめっちゃ悪くなったよな。学校に行けへんかったりと、リモート授業もあんま集中できひんし。でも、勉強の意欲はコロナのおかげで上がったよ。

坂: え、なんで？

安: 毎日何名が亡くなったとかニュースで見るたびに、医者になって人を救いたいっていう気持ちが増したから。がんばって勉強して立派な医者になるってコロナのおかげで思えた。だから前よりさらに勉強の意欲は上がったし、勉強する時間も増えたかな。

坂: 素敵やなあ。がんばってな！ 応援してるで！

さて、安藤くんの話聞いてると、プラスのことが前向きなことが結構あったけど、コロナのことはどう思ってる？

安: 総合的に言ったら、憎いとまではいかんけどやっぱりコロナのことは嫌いやで。学校の行事は無くなったり、しょぼくなったし。プラスのことももちろんあったけど、マイナスのこのの方が圧倒的に多かったかな。

坂: そりやそうよな。コロナのおかげで良い方向に価値観や気持ちが変わったとはいえ、やっぱりコロナがない方が学校生活は楽しいもんな。

安: まあでも、なにを言ってもコロナウイルスが消えることは無いし、この現実と一緒にがんばっていくしかないわな。

坂: その通りやと思うわ。

くまさん
(20歳)大学生
元ボランティア



僕が1年生の終わりの春くらいにこういう状況になったので、ほぼ1年間は大学生を経験したことになります。授業受けて、サークル行つて、バイトしてという典型的な大学生生活でした。

コロナが流行して、それまで通りの活動ができなくなったので、結果的に時間ができました。今までしていたことじゃなかったんだと。以前までの行いをリセットして、新しいことをやる状況にはなりましたが、いざ「自分はなにがやりたいんだろ」と考えてみても、なにも思いつかなかった。状況的に人とも会えないし、家で二人で悶々としていました。「なんか違うな」じゃなくてちゃんとやりたいと思えることを探そうとしていたけど、考えれば考えるほどどれもそれに値しない気がして、「どうしたらいいんだろ」「自分がやることは全て暇つぶしなんじゃないか」と思えてきて苦しかったです。

その頃ある本を読んで、「有意義なことなんてそうそう見つからない、なら最初からそう割り切つてしまえばいい」と思えるようになりました。「なんか経験してみてもいいんじゃないか。とりあえずいろんなことやってみよう」ということの二環にボランティアがありました。

その中でも指針を見つけたかったで、いろんな人に出会っているんな人生を知れる活動がいいなと思いました。やませい(山科青少年活動センター)でのカフェボランティアを選んだのも、ごく一部の世界だけにいる気がした自分にとって、今まで出会えなかった人と出会えて話したいなと思ったからです。

コロナ流行以前は、生活のいろんな場面で急がされていた気がします。「社会的にこうしなきゃいけない」というルールに従ってたけど、今は必ずしもそこに従ってて正解というわけでもないと思うようになりました。小さな一歩かもしれないけど、新しい環境にいざ踏み出してみたら、いろんな人と知り合えて、めちゃくちゃ大きな収穫があったと思います。



「withコロナ」時代の 若者のこれから

「新しい生活様式」で暮らす今の時代は「withコロナ」と言われることも多くなってきました。「withコロナ」で若者の生活や活動も変化しています。コロナ禍からの「これから」を見据えて活動を行う、学生団体「FREE京都」さんにお話を伺いました。

Oさん
(大学4年生)

Mさん
(大学2年生)



FREE京都

学生アドボカシー・グループ『高等教育無償化プロジェクト』。
かけがえのない人生を豊かにする学びを、経済的事情に左右されず、あらゆる人が権利として享受できる、未来ある社会を実現するために、すべての人への高等教育の無償化を目指します。
HP: <https://freekyoto01.wixsite.com/info>
Twitter: @FreeKyoto

新型コロナウイルスの流行が始まった今年春頃は、FREE京都ではどのような活動を行われましたか？

「新型コロナ感染拡大の学生生活への影響調査」として大学生を対象にしたアンケートを4月21日から5月いっぱいまでWEBを通じて実施しました。全国で590件、そのうち490件は京都で回答が集まり、全国では5人に1人、京都では4人に1人が退学を考えていることが明らかになりました。その後、アンケート結果を反映した陳情書を京都府議会・京都市議会と京都府・京都市に提出しました。

今回のアンケートをなぜ、どのような思いで実施されたのでしょうか。

FREE京都は2019年11月に、「高等教育の無償化」を政治の中で変えていくことを目的に設立されました。コロナ禍以前から学生の実態をいろんな人に知ってもらいたいということで「バイトをしすぎて大変になっていないですか?」「奨学金をどれくらい借りていますか?」「将来の不安」などアンケートを取り、国や行政に働きかけていました。コロナ禍になり、3月の時点で多くの大学がオンライン授業に切り替えるという方針が出て、さらに学生のバイトがどんどん切られている現状が明らかになりました。今まで以上に苦しんでいる学生がいるのではないかと思います。コロナ禍における学生の声を伝えようと実施しました。

結果は、オンライン授業への不満・学費が払えない・人と会えなくて精神的にしんどいといった声が多かったです。地方から来た学生は周りに頼る人がいないことも多く聞かれました。また新入生は、バイトが見つからないし、そもそもバイトをしていなかったで休業補償が受けられません。特に新入生の声は聞いていて辛かったですね。

FREE京都として、コロナ禍においてこれからの若者はどのように生きていくと思われますか？

現在の学生は学びの権利を享受できていない状態です。コロナ禍で、ほとんどの学生がこの問題に突き当たったという実感があります。学費が払えずに「これからどう学生生活を送ればいいのか」と悩む学生は、コロナ禍だから起こった問題ではなく、もともと社会で存在していた問題ではないかと気づいた方も多かったのではないのでしょうか。

学生には自身の「教育の権利」「学費の問題」について考えてほしいし、社会には「教育に予算をかけることがなぜ大切なのか」ということを考えてほしいと思います。

今回のコロナ禍で、どういう学びが享受できなくなったのかをもう一度問い直す必要があるのではないかと。また大学と学生の双方で、学生が学べるように検証されていくべきではないかと思っています。

また今後の社会を展望していく上で、新型コロナウイルスの対策だけでなく、学生の学びを軽視してきたこれまでの社会を変えていかないと、根本的な解決にはならないのではないかと思います。

FREE京都は、これからも学生の実態を社会に届けるということを大事にしていきたいと思っています。

特集

コロナ禍の若者のリアル まとめ

個人のリアルな言葉を通して表れた、コロナ禍の時代を生きる若者の「今まで」と「これから」は、読者のみなさんにどのように写ったのでしょうか。

インタビューでは、友達が作れなくて寂しいという大学1年生の声もありましたが、学校の休校に合わせて自分のペースで勉強ができたという声や、コロナ禍で自分の生活を見直せた、夢に向かってがんばる気持ちが増したというエピソードもあり、状況に合わせてポジティブに捉えている若者も多い印象を受けました。

FREE京都さんからは、コロナ禍が落ち着いたとしても、社会全体で大学生の学びについて考えていくべきだと、大学生当事者だからこそ実感している活動の思いを伺いました。

若者それぞれで変化した環境、受け取る感覚はさまざまですが、若者も社会の一員として、このコロナ禍で声を上げ、感染対策をしながら、より生きやすくなることを目指して行動しているのは共通だと感じます。

今回の特集が若者の「リアル」の全てではありませんが、ニュースやデータ上だけではわからない若者の姿を少しでも受け取っていただければ幸いです。

編集担当グループ



衝撃的だった2020年の上半期。京都市ユースサービス協会では、若者は何を感じ、どんな過ごし方をしていたのか、みんなで語り合いたいという思いのもと、9月27日(日)に『ユースシンポジウム2020“この半年を語ろうぜ!”』を実施しました。イベント当日に話されたことや、事前企画として『自粛中のモヤモヤ・叫びをきかせて!』と題し、各青少年活動センターのロビーで集めた声をご紹介します。また、シンポジウムの参加者の感想も掲載しています。

こんな時期だからこそ、人とのつながりを大切にして生活したい意欲が増した

あたりまえのように外出していたことが幸せだったな～

はじめはけっこう楽しかった! 学校の先生が怖いかわからんから手抜きづらい

たっぷり時間ができたので楽しいこともいっぱいありました

普段やれないことやれた!

家の時間は鬼の暇!

JK最後の夏 自分たちの手で楽しむー!

家族という時間が増えてイライラすることいっぱいあったよおお!! (すべて自分が悪かったけど) けど大好きなラジオ聞く時間あって正直うれしかったけど勉強やばい!!

やることを見つけるのが難しいけどそれを考えるのはけっこう楽しい

勉強せんとあかん けどひま

マスクをはずして遊びたい

規則正しい生活を送ることができなくて自分の自己管理能力の低さに落ち込んだ

大きな声で歌いた～～い

永遠に眠った

HOME

バイトに追われつつも、好きなことができる生活! 悪くない

社会がコロナうるさい

会いたい人や行きたい場所に行けなくて、今まで普通に暮らせていた幸せを改めて感じた

過去をうじうじ悩むより、未来を見て歩きたい

コロナぶっこわす!

ピエンピエンピエン
ピエンぴえんぴえん
ぴえんぴえん

推しに会えた!

テレワーク、通勤しなくてよい

神様推しに会わせてください

早く以前のように活動したいなあ

早く落ち着いてほしい

活動メンバーに会えなくてさみしい

オンラインでの会議“シーン”の時間ができる

先輩からアドバイスをもらっても、コロナの前と後では条件が違うので安心できない……

就活を前にして、在宅でもできる仕事に興味を持った

学校むり
部活むり
家族むり
すべてがめんどい!
受験生やめたい!
やせたい



ギリギリまで寝ててもよかったし神まじずっとリモートがいい

学校はじまらんくていい

学生生活を返してください

オンライン授業で楽しい

スタート失敗した!

宿題多くて、うざかった!

卒業前の行事が中止に……コロナ許すまじ

卒業式&入学式
まともにやってない
ピエン

休校中→学校はじまってほしい
今→休みしたい!

課題疲れ

クラスLINEできたけど誰か知らない

SCHOOL

ユースシンポジウムに参加して感じたこと

- 密になってはいけなく、密になる大切さ。
- 活動は私にとって最大の学び場であるけれど、こうしてコロナ期間を皆で乗り切ろうと考える機会も最高の学びだと気付くことができました。
- 仕事は生活するうえで必要。でも人生の全てではない。一度働いてみて他に楽しいことが見つかったらそちらを選択していけばいい。
- こんなにいろんな経験を持つ人たちと交流を持てたのがとても貴重でした。
- 何かを進めようとする時にもコロナの影がチラつく中、今まで以上に何かを始めようとする力があるのだと思います。

ユースシンポジウム2020の報告はコチラ



SOCIETY